

原作:ヨーロッパ言語教育履修生ポートフォリオ
EPOSTL (European Portfolio for Student Teachers of Languages)

成長のための省察ツール

言語教師のポートフォリオ

【英語教職課程編】

JACET教育問題研究会 編
監修: 神保尚武 / 編集: 久村 研, 酒井志延, 高木亜希子



J-POSTL

Japanese Portfolio for Student Teachers of Languages

For Pre-service English Teacher Education

JACET SIG on English Language Education
<http://www.waseda.jp/assoc-jacetedu/>



European Portfolio for Student Teachers of Languages — A reflection tool for language teacher education (EPOSTL)

ISBN 978-92-871-6207-6

by David Newby, Rebecca Allan, Anne-Brit Fenner, Barry Jones, Hanna Komorowska and Kristine Soghikyan

The copyright for the original version is held by the Council of Europe:

© Council of Europe, 2007

Japanese adaptation:

『言語教師のポートフォリオ』 (Gengo Kyoshi no Portfolio)

Japanese Portfolio for Student Teachers of Languages

Versions:

1. 【英語教師教育全編】 (Eigo Kyoshi Kyoiku Zenpen)

【Full Version: For English Teacher Education】

2. 【英語教職課程編】 (Eigo Kyoshoku Katei Hen)

【For Pre-service English Teacher Education】

3. 【現職英語教師編】 (Genshoku Eigo Kyoshi Hen)

【For In-service English Teacher Education】

Sub-title: 成長のための省察ツール (Seicho no tameno Seisatsu Tool)

A Reflection Tool for Professional Development

Published in 2014

by JACET SIG on English Language Education

All rights reserved. This translation and adaptation is published with permission of the Council of Europe and is the sole responsibility of the translator.

For information on original publication:

Council of Europe/European Centre for Modern Languages

Nikolaipplatz 4

A-8020 Graz

Austria

<http://www.ecml.at>

目次

編集組織

『言語教師のポートフォリオ』について	1
『ヨーロッパ言語教育履修生ポートフォリオ (EPOSTL)』の序論から	3
本書の使い方	5
自分自身について	8
自己評価記述文	11
I 教育環境 / 12 II 教授法 / 18 III 教授資料の入手先 / 23	
IV 授業計画 / 25 V 授業実践 / 29 VI 自立学習 / 33	
VII 評価 / 35	
学習・実践記録	38
用語解説	46
利用者ガイド	54
J-POSTL の開発 / 54 ヨーロッパにおける EPOSTL の導入・利点・課題 / 56	

編集組織

監修	神保尚武 (Jimbo, Hisatake) jimbo@waseda.jp	早稲田大学商学学術院教授 (Professor, Waseda University)
編集代表	久村 研 (Hisamura, Ken) dzj01411@nifty.com	田園調布学園大学子ども未来学部教授 (Professor, Den-en Chofu University)
編集副代表	酒井志延 (Sakai, Shien) shiensakai@nifty.com	千葉商科大学商経学部教授 (Professor, Chiba University of Commerce)
教職課程編 編集担当	高木亜希子 (Takagi, Akiko) atakagi@ephs.aoyama.ac.jp	青山学院大学教育人間科学部准教授 (Associate Professor, Aoyama Gakuin University)
現職教師編 編集担当	清田洋一 (Kiyota, Yoichi) td4y-kyt@asahi-net.or.jp	明星大学教育学部准教授 (Associate Professor, Meisei University)
編集委員	遠藤雪枝 (Endo, Yukie)	清泉女子大学専任講師
編集委員	今村洋美 (Imamura, Hiromi)	中部大学全学英語教育科教授
編集委員	石田雅近 (Ishida, Masachika)	清泉女子大学文学部教授
編集委員	伊東弥香 (Ito, Mika)	東海大学外国語教育センター准教授
編集委員	栗原文子 (Kurihara, Fumiko)	中央大学商学部准教授
編集委員	中山夏恵 (Nakayama, Natsue)	共愛学園前橋国際大学国際社会学部准教授
編集委員	小田眞幸 (Oda, Masaki)	玉川大学文学部教授
編集委員	大崎さつき (Osaki, Satsuki)	創価大学文学部准教授
編集委員	臼井芳子 (Usui, Yoshiko)	獨協大学国際教養学部准教授
編集委員	山口高領 (Yamaguchi, Takane)	早稲田大学社会科学学術院講師 (任期付)
編集委員	Yoffe, Leonid	早稲田大学商学学術院准教授
編集協力	浅岡千利世 (Asaoka, Chitose)	獨協大学外国語学部准教授
編集協力	河内山晶子 (Kochiyama, Akiko)	明星大学教育学部教授
編集協力	高梨庸雄 (Takanashi, Tsuneo)	弘前大学名誉教授
編集協力	山岸信義 (Yamagishi, Nobuyoshi)	元日本教育大学大学院客員教授
内容校正	醍醐路子 (Daigo, Michiko)	元豊島区立駒込中学校校長

『言語教師のポートフォリオ』について

■ EPOSTL の翻案化と基本理念

原作の EPOSTL 「ヨーロッパ言語教育履修生ポートフォリオ」(the European Portfolio for Student Teachers of Languages) (Newby et al., 2007) には、ヨーロッパにおいて研究されてきた言語教育のあらゆる知見が含まれています。自律的な成長を促すとされるポートフォリオという形式を取り入れている点ばかりではありません。具体的には、Can-do の形で 195 の自己評価記述文に知見が集約されています。2008 年 8 月に EPOSTL と出会ってから、足掛け 5 年間の調査の結果、EPOSTL のほとんどの自己評価記述文は日本の教育環境で受容可能であることが判りました。日本とヨーロッパは教育的文脈が異なるとはいえ、言語教育の本質と方向性は大きく異なってはいません。

しかし、全く同じ内容では使用に無理が生じたり、日本語の文言にはなじまない記述文がありました。従って、EPOSTL を翻訳するだけでなく、本文書が日本の言語教育改善に役立つ内容になるよう文脈化する必要がありました。こういうわけで、本文書は EPOSTL を単に訳出したものではなく、日本の言語教育環境でも受容できるように翻案化し、邦題は「言語教師のポートフォリオ」、英字略語では原題を模して J-POSTL と名づけました。また、日本の外国語教育の大半は英語教育なので、対象は英語教職課程の履修生と現職英語教師としました。

EPOSTL の優れた点は、ポートフォリオという形式や自己評価記述文という目に見えるもの以外に、それらが作成されるに至った、しっかりした理念があることです。J-POSTL が踏襲する理念として、ここでは特に次の 2 点を強調しておきます。

- ・ 行動志向の言語観 (Action-oriented view of language)
- ・ 生涯学習 (Life-long learning)

行動志向の言語観では、言語教育は、場面・概念・機能シラバスによる、人同士の交流 (インタラクション) を中心としたコミュニカティブな指導法 (CLT) が理想的な教授法と考えられています。

一方、生涯学習については次のように考えられます。これまでの日本の学校英語教育では、「(英検や TOEIC などの) 能力試験で良い成績をとる」、「入試に合格する」、「仕事で使える」という 3 種の英語力が目標とされ、学習者の動機付けとなってきました。しかし、こういう目標は、短期または中期的な目標にはなりえても長期的な目標とはなりえず、また外的な動機付けに過ぎません。これらに代わる、英語学習の長期的目標や、内的動機付けとなりうる観点が生涯学習、言い換えると「学び方を身につけること (learning to learn)」です。つまり、自分の意思で英語の学習を始め、学習の管理ができる自律した学習者になること。そして、英語の学習は役に立ち生涯を豊かなものにするという実用感覚を一生持ち続けること。こういった長期的な目標を持てるようになることです。

その結果、主に次の 5 点の目的を持つポートフォリオを開発することができました。

- ・ 英語教師に求められる授業力を明示する
- ・ 授業力とそれを支える基礎知識・技術の振り返りを促す
- ・ 同僚や指導者との話し合いと協働を促進する

- ・ 自らの授業の自己評価力を高める
- ・ 成長を記録する手段を提供する

■ J-POSTL の枠組み

J-POSTL は主として、EPOSTL の中核をなす 195 の自己評価記述文 (SAD: Self-Assessment Descriptors) を翻案化したものです。したがって、それぞれのボックスにある SAD の数値は注目しておく必要があります。

【英語教職課程編】 (SAD: 96)				
【現職英語教師編】 (SAD: 115)				
履修学生 (SAD: 65)	初任教师 (SAD: 31)	育成教師 (SAD: 30)	中堅教師 (SAD: 20)	熟練教師 (SAD: 9)
未設定記述文(SAD: 25)				

<表の見方>

- ・ 【英語教職課程編】は当初 100 の SAD で構成されていましたが、調査を経て教職履修学生にふさわしいもの、初任教师にふさわしいものに分類できました。学生には、授業力には 1 歩先があること示す意味と、挑戦させる意味で、初任教师の SAD をこの編に含めています。
- ・ 【現職英語教師編】は全国調査によって 3 段階に分けることができました。教師の経験年数（育成：2～5 年程度、中堅：5～10 年程度、熟練：10 年以上）を基にしていますが、経験年数にとらわれず、授業力のレベルを表したものです。熟練教師は初任や育成教師の指導者（メンター）としての力量を備えていることが望ましいと考えられます。また、未設定記述文とは、段階別に分けることができなかった SAD のことです。つまり、異文化や自律に関する SAD が主で、現状では経験年数や通常の研修では成長しないことが判っています。従って、初任段階から研修が必要であるという意味を表しています。ただし、初任教师の SAD は 2 つの編に含めています。未設定の SAD は【英語教職課程編】には含めていません。

■ 活用のポイント

以上の通り、3 分冊にしたことによって、状況や用途に応じた使い方が可能になります。また、研究会のウェブ上ですべて公開しているので、個々の対象に応じて必要な部分を切り取って使用できます。養成課程、初任研修、5 年次研修、免許更新講習、校内研修、自己研修など教師教育のあらゆる場面で、教師の成長のツールとなります。ポイントは、1 度手に取ったら、キャリア全体を通じて使い続けることです。

本研究会のウェブ・アドレスは以下の通りです。

<http://www.waseda.jp/assoc:jacetededu/>

『ヨーロッパ言語教育履修生ポートフォリオ (EPOSTL)』 の序論から

■ EPOSTL とは

「ヨーロッパ言語教育履修生ポートフォリオ」(EPOSTL: the European Portfolio for Student Teachers of Languages)とは、ヨーロッパにおける言語教育の教員養成課程履修生のための文書です。EPOSTLを使うと、言語を教えるために必要な教授法の知識や技術について振り返る(省察する)ようになり、自分自身の授業力を評価するのに役立つばかりでなく、自分の成長を確認しながら教職課程での教育経験を記録することができます。

■ EPOSTL の主な目的

1. 教師に求められる授業力と、その授業力を支える基本的な知識を省察するよう促すこと
2. 多様な教育環境にある将来の専門職(教育職)に就くための準備に役立たせること
3. 自分と仲間の履修生や、自分と指導者やメンターの間での意見交換を促すこと
4. 向上しつつある自分の力量に対して自己評価を促すこと
5. 進歩を記録するのに役立つツールを提供すること

■ EPOSTL の内容

EPOSTL は次のセクションで構成されています。

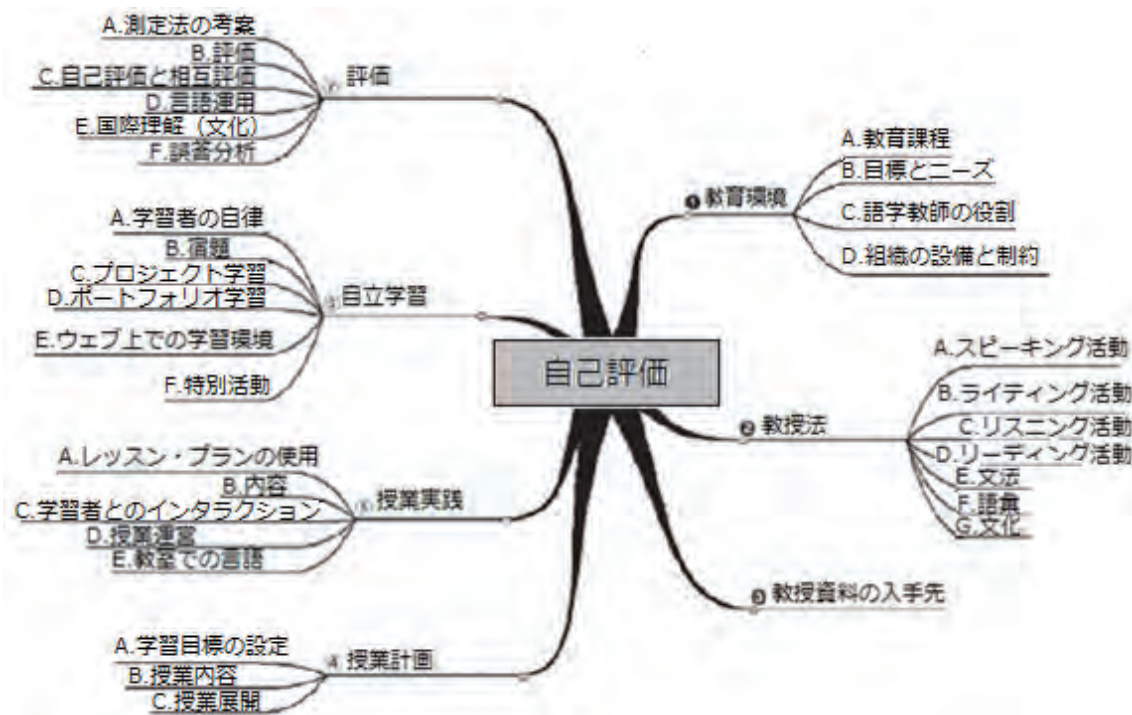
- ・ 自分自身に関するセクション：教師教育の初段階で、教育に関する全般的な課題を振り返るよう促しています。
- ・ 自己評価のセクション：Can-do 形式の記述文で構成され、省察と自己評価を促進します。
- ・ ドシエ(関係資料集)：成長の証(エビデンス)となるものを保存し、教育に関わる自作の文書・資料などを記録しておくセクションで、自己評価結果の裏付けとなります。
- ・ 用語解説集：EPOSTL で使われている言語学習/教授に関する最も重要な用語を説明しています。
- ・ 索引：記述文で使われている用語索引です。
- ・ 利用者ガイド：EPOSTL についての詳細な情報が掲載してあります。

■ 自己評価記述文

EPOSTL の中核には、言語教授に関する 195 の能力記述文があり、それが自己評価のセクションを構成しています。これらの記述文は、言語教師が努力して達成すべき中心的な能力と考えられるでしょう。

■ 記述文の分類

記述文は、大きく 7 つの分野に分けられています。この 7 分野は、教師に求められる知識、種々の能力、および、教育上の判断を含む領域を表しています。7 分野(①～⑦)の表題は以下の通りで、それぞれ下位分類されています。



■ 自己評価の尺度

各記述文には矢印ブロックが付いているので、自分の能力を視覚的に記録しておくのに役立ちます。自己評価に従って、ブロックの中に色を塗って下さい。養成課程や教員研修などのいろいろな段階で、繰り返し利用することができます。教員養成課程終了時には、例えば、以下のような状態になっているかもしれません。

1. 話しやすい雰囲気の中で具体的な言語使用場面を設定することにより、学習者を活動に積極的に参加させる指導ができる。



上記の例では、この学生は、教職課程履修中に3回自己評価をしており、その自己評価で自分の授業力が向上していることを表しています。しかし、まだ今後伸びる余地があると考えているために、矢印ブロックには空欄の部分が残されています。また、自己評価がなされた日付も記入（数字の読み方は[日.月.年]の順）しています。大事なことは、教職課程の終了時点で、矢印ブロックを色と日付ですっかり埋めつくしてはいけないということです。教え方を身につけ、よい教師になるということは、継続的で生涯にわたるプロセスなのです。

EPOSTLに掲載されている記述文は、授業力に関する系統的な考え方を提供してはくれますが、チェックリストと見なすべきではありません。履修生、教師教育の指導者、メンターにとって、記述文が、その背景にある教師教育の重要な側面について意見交換をする際に指標として機能すること、および、記述文が教職の専門意識を高める役割を果たすことが重要なのです。

本書の使い方

1. 目的

本ポートフォリオは、履修学生が、教職課程や実習先で学んだことを継続的に記録し、自分の成長に役立てるためのものです。成長を記録し振り返ることで、自己の長所や改善点に気づき、教職に対する気づきや学びが促されます。

2. 利用期間

本ポートフォリオを受け取ってから、4年次の教職課程修了時まで活用してください。

3. 構成

本ポートフォリオは主として次の3つの内容で構成されています。

(1) 自分自身について

本ポートフォリオを受け取ってから教育実習前までに、それまでの英語学習経験、教職課程や教育実習に対する期待や不安を書いてください。また、英語教師として大切な資質能力について考えてみましょう。

(2) 授業力自己評価記述文（Can-do 形式による）

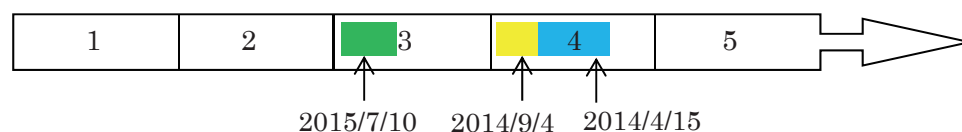
記述文を使って、自己の教職課程での学習や実習での教育実践を振り返ってください。

自己評価記述文は全7分野（Ⅰ 教育環境、Ⅱ 教授法、Ⅲ 教授資料の入手先、Ⅳ 授業計画、Ⅴ 授業実践、Ⅵ 自立学習、Ⅶ 評価）、計96項目（初任者対象の記述文31項目は現職英語教師編と重複）で構成されています。振り返りは、少なくとも実習終了後の事後指導までに3回行います。振り返る時期は、例えばポートフォリオを受け取った時、教育実習前（例：3年次の学年末）、教育実習後（例：4年次の秋）です。その後、「教育実習演習」終了時や教職に就いてからも授業力を自己評価するために活用することができます。

授業力自己評価の記入方法

各項目の下には、細長い矢印ブロックがあります。各項目に対して自らの到達度に対する意識を5段階（5-できる、4-まあまあできる、3-どちらともいえない、2-あまりよくできない、1-できない）で判断してください。5段階の中で該当する箇所を塗りつぶしたり、左寄り、中央、あるいは右寄りにしてもよいでしょう。次ページの記入例のように、記入した年月日も記載します。以前の自己評価よりも下がる場合もあります。また、学習や経験をしていない項目は無理に回答しなくても結構です。

・実施日の色別による自己評価記入例



(3) 学習・実践記録（ドシエ）

本ポートフォリオを受け取ってから教育実習終了までの期間、以下の 2 つの分野について記録してください。授業力自己評価項目について、自分の判断の根拠や、判断が適切であるか否かを示すことができます。

① 学習・実践の記録

実施日、指導目標・実践事項、学習・実践内容の概要と生徒の変容及びコメント

② 継続的な学習・実践の記録

上記①の他に継続的な学習・実践がある場合のみ記入

なお、本ポートフォリオの最後に「用語解説（Glossary）」をつけました。授業力自己評価項目中の用語を理解するために参照してください。

4. 利用方法

① 記録する

- ・ 教職課程履修中に、必要に応じて「個人学習・実践記録」に自己の学習や教育実践を記録しておきましょう。

② 振り返る

- ・ 教職課程履修中に、少なくとも 3 回は授業力自己評価項目で自分自身を振り返り、自己の課題について考える習慣をつけましょう。
- ・ 教職履修課程中に、自己分析の資料として活用しましょう。
- ・ 教職に就いた後でも、自分の成長のための振り返りの道具として、ポートフォリオを利用し続けましょう。

③ 相談する

- ・ 教職担当や教育実習先の先生にポートフォリオを見てもらい、適切な助言を受ける機会を作りましょう。
- ・ 教職のあり方や授業実践などについて、学生同士で話し合う機会を持ち、その際にポートフォリオを活用しましょう。

5. 教職担当の先生方へ

本ポートフォリオは全てを利用する必要はありません。各大学のカリキュラムに合わせて、利用できる箇所を柔軟にお考えください。

(1) 本ポートフォリオの利用目的

本ポートフォリオの利用目的は主に以下の5点です。

- ・英語授業力の構成要素を明らかにする
- ・英語授業力を支える知識・技術を振り返ることを促す
- ・履修生の議論を促す
- ・履修生同士の自己評価を促す
- ・成長を記録する手段を提供する

(2) 利用例

①

利用場面：教職科目における講義

利用箇所：自分自身についての「過去の学習経験」

利用方法：授業で履修生同士の議論のテーマとして利用し、なぜある教え方は良かったのか、また良くなかったのか振り返り分析する。

②

利用場面：教職科目における模擬授業後

利用箇所：振り返りのための授業力自己評価記述文の「授業計画」と「授業実践」

利用方法：模擬授業後、履修生同士で Can-do 記述文の分析を行ったり、実践を支える理論について議論をする。

③

利用場面：教育実習中

利用箇所：振り返りのための授業力自己評価記述文の「授業計画」

利用方法：教壇実習前に、Can-do 記述文を参考に、授業のねらいや目的を設定する。

④

利用場面：教育実習中

利用箇所：振り返りのための授業力自己評価記述文の「授業実践」

利用方法：教壇実習後、Can-do 記述文を基に、履修生が指導教員と授業を振り返る。

⑤

利用場面：教職課程履修開始から終了時

利用箇所：学習・実践記録表

利用方法：履修生の成長を示す証拠資料の一部として利用する。

⑥

利用場面：教職課程履修開始から終了時

利用箇所：振り返りのための授業力自己評価記述文

利用方法：振り返りのための授業力自己評価記述文により、履修生の英語授業力に対する認識を確認することで、大学の英語教職課程プログラムの利点と問題点を明らかにする。

自分自身について

記入日： 年 月 日 (曜日)

1. 過去の英語学習経験

これまで英語を教わってきたことを振り返り、良かった、あるいは良くなかったと思う教え方や授業内容などを自由に記述してください。

a) 良かった内容

b) 良くなかった内容

2. 教職課程に対する期待

教職課程（教科教育法の授業や教育実習など）を通して何ができるようになりたいですか。

3. 教育実習に臨む前の期待と不安

a) 教育実習の指導で楽しみにしていることは何ですか。

b) 教育実習の指導で不安に思っていることは何ですか。

4. 教師の資質能力

4.1 英語教師として大切な資質能力は何だと思えますか。次の例のあとに続けて、書き加えてみましょう。また、それぞれの項目はどれぐらい重要ですか。重要度を5段階（5-重要である、4-まあまあ重要である、3-どちらともいえない、2-あまり重要でない、1-重要ではない）で判断してください。

	項 目	重要度				
1	他の教師と協力することができる	5	4	3	2	1
2	自分の職務を理解し遂行することができる	5	4	3	2	1
3	文法を説明することができる	5	4	3	2	1
4		5	4	3	2	1
5		5	4	3	2	1
6		5	4	3	2	1
7		5	4	3	2	1
8		5	4	3	2	1
9		5	4	3	2	1
10		5	4	3	2	1

4.2 以下の例を参考にして、履修者同士で、各項目について話し合ってみましょう。

①例えば「文法を説明することができる」に対して、あなたが「5-重要である」と判断した場合、どうして重要だと考えるのかペアあるいはグループのメンバーに具体例を出しながら説明をしてみましょう。

②次に「文法を説明することができる」とはどのような能力なのか、ペアまたはグループで話し合いましょう（例：教師が文法解説を日本語あるいは英語でできる、生徒に用例を与え分析させることができるなど）。

～振り返りの重要性～

「言語教師のポートフォリオ」では、ただ質問に回答するだけでなく、「4.教師の資質能力」のように自らの考えや行動を振り返ることが大切です。

次の「自己評価記述文」においても、与えられた質問に対して、それぞれの文の意味をよく考え、そのうえで、教職課程で学習した内容や模擬授業を自ら振り返ることで自律した教員へ成長していくことを目指してください。そして、教職担当や教育実習先の先生あるいは履修生同士でそれぞれの考えを共有し、話し合うこと（振り返ること）で教授法などについて多角的に考える機会を作ってください。

皆さんが自律した教師へ成長するために是非このポートフォリオを役立てていただきたいと思います。

自己評価記述文

自己評価記述文 — 目次	
I 教育環境 12	V 授業実践 29
A. 教育課程	A. レッスン・プランの使用
B. 目標とニーズ	B. 内容
C. 言語教師の役割	C. 学習者とのインタラクション
D. 組織の設備と制約	D. 授業運営
II 教授法 16	E. 教室での言語
A. スピーキング活動	VI 自立学習 33
B. ライティング活動	A. 学習者の自律
C. リスニング活動	B. 宿題
D. リーディング活動	VII 評価 35
E. 文法	A. 測定具の考案
F. 語彙	B. 評価
G. 文化	C. 自己評価と相互評価【現職英語教師編】
III 教授資料の入手先 23	D. 言語運用
IV 授業計画 25	E. 国際理解（文化）
A. 学習目標の設定	F. 誤答分析
B. 授業内容	
C. 授業展開	

■ 凡例

各記述文の文尾の記号は以下の意味を表す。

- ・ 無印：教職課程履修学生用
- ・ [N]：初任教师用：N=Novice：この記述文は【英語教職課程編】【現職英語教師編】の両者に掲載される。

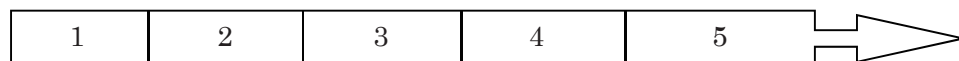
序文

教師は専門分野の最新情報を手に入れるばかりでなく、自分の教育実践に対しての自己評価（省察）や同僚のコメントやアドバイスを通して、継続的に専門性の向上につとめる必要がある観点から、本分野では教師の職務に影響をあたえる教育的、社会的環境に関わる事項を扱う。授業力と関わる具体的な内容は以下の通りである：

- ・ 国の学習指導要領や地方の教育施策
- ・ 学校の教育課程
- ・ 学習者のニーズ
- ・ 保護者の教育に対する考え
- ・ 言語教師の役割
- ・ 勤務校における教育設備

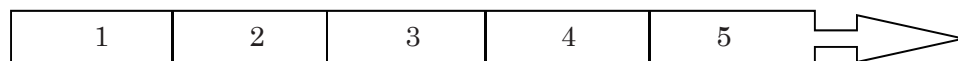
A. 教育課程 (Curriculum)

1. 学習指導要領に記述された内容を理解できる。

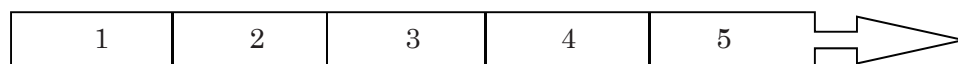


B. 目標とニーズ (Aims and Needs)

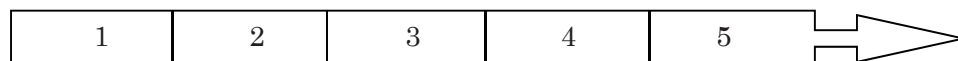
1. 英語を学習することの意義を理解できる。



2. 学習指導要領と学習者のニーズに基づいて到達目標を考慮できる。



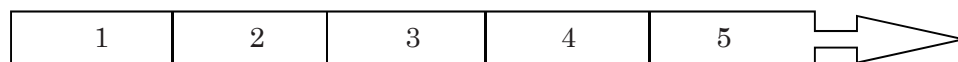
3. 学習者が英語を学習する動機を考慮できる。



4. 学習者の知的関心を考慮できる。



5. 学習者の達成感を考慮できる。



C. 言語教師の役割 (The Role of the Language Teacher)

1. 学習者と保護者に対して英語学習の意義や利点を説明できる。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

2. 学習者の母語の知識に配慮し、英語を指導する際にそれを活用できる。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

3. 理論を理解して、自分の授業を批判的に評価できる。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

4. 学習者からのフィードバックや学習の成果に基づいて、自分の授業を批判的に評価し、状況に合わせて変えることができる。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

5. 他の実習生や指導教諭からのフィードバックを受け入れ、自分の授業に反映できる。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

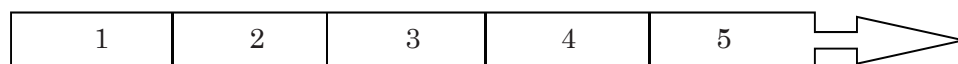
6. 他の実習生の授業を観察し、建設的にフィードバックできる。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

7. 計画・実行・反省の手順で、学習者や授業に関する課題を認識できる。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

8. 授業や学習に関連した情報を収集できる。



D. 組織の設備と制約 (Institutional Resources and Constraints)

1. 実習校における設備や教育機器を，授業などで状況に応じて活用できる。



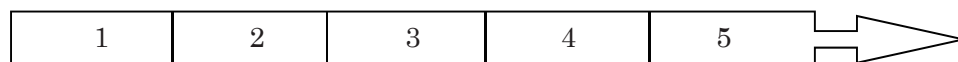
序文

短期，中期，長期の教育活動において，指導すべき言語の技能をどのように扱うかについて考える。クラスにおけるコミュニケーション活動では，たいていの場合，2つあるいは3つの技能が融合するので，1つの技能のみを単独で扱うことはめったにない。また，文法，語彙，発音は，コミュニケーションと結びつけて指導する方が効果的であることをふまえる必要がある。ここで扱う具体的な指導は以下の通りである：

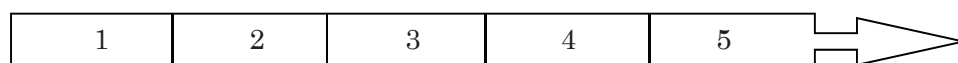
- ・ 口頭でのインタラクションを含むスピーキング活動
- ・ 文字によるインタラクションを含むライティング活動
- ・ リスニング活動
- ・ リーディング活動
- ・ 文法
- ・ 語彙
- ・ 文化

A. スピーキング活動 (Speaking/Spoken Interaction)

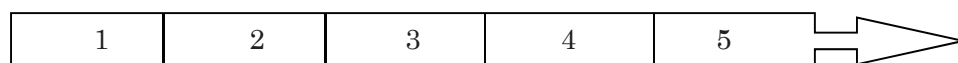
1. 学習者をスピーキング活動に積極的に参加させるために、協力的な雰囲気を作り出し、具体的な言語使用場面を設定できる。



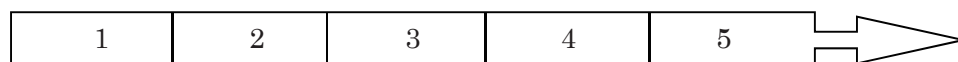
2. 自分の意見，身の回りのことおよび自国の文化などについて伝える力を育成するための活動を設定できる。



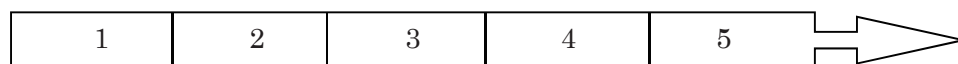
3. 発表や討論などができる力を育成するための活動を設定できる。[N]



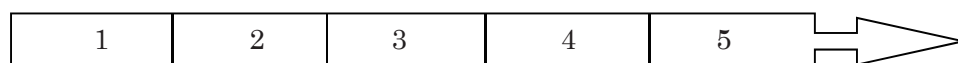
4. つなぎ言葉，あいづちなどを効果的に使って，相手とインタラクションができる力を育成するための活動を設定できる。[N]



5. 強勢，リズム，イントネーションなどを身につけさせるような様々な活動を設定できる。[N]

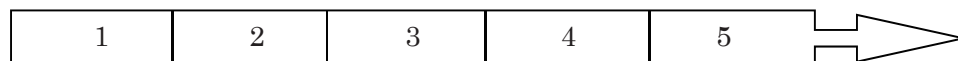


6. 語彙や文法知識などを用いて正確に話す力を育成するための音声指導ができる。[N]

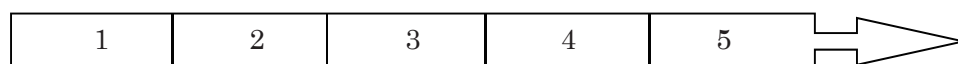


B. ライティング活動 (Writing/Written Interaction)

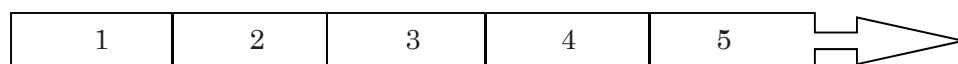
1. 学習者がライティングの課題のために情報を収集し共有することを支援できる。



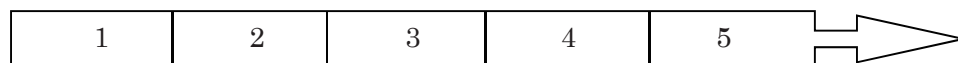
2. 学習者が持っているライティング能力を伸ばすために、言語の使用場面と言語の働きに応じた指導ができる。[N]



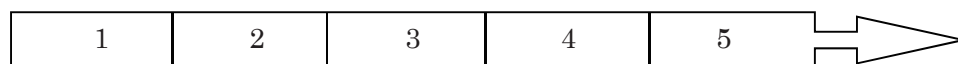
3. 学習者がEメールなどのやりとりを行うのを支援する活動を設定できる。[N]



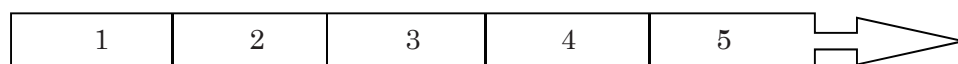
4. 学習者がマインドマップやアウトラインを用いて文章を書くための支援ができる。[N]



5. 学習者がまとまりのあるパラグラフやエッセイを書くための支援ができる。
[N]

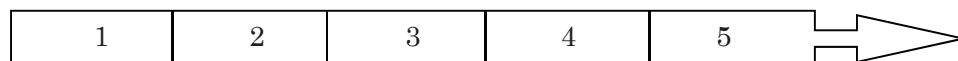


6. 学習者が学習した綴り、語彙や文法などの定着に役立つライティング活動を設定できる。[N]

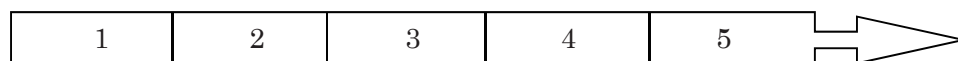


C. リスニング活動 (Listening)

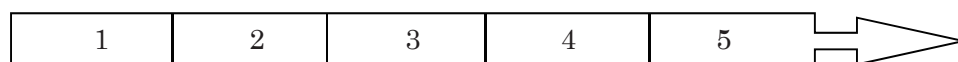
1. 学習者のニーズ，興味・関心，到達度に適した教材を選択できる。



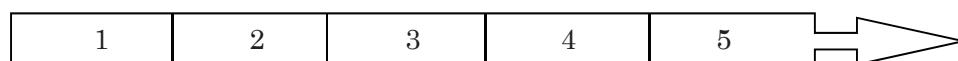
2. 学習者が教材に関心が向くよう，聞く前の活動を計画できる。



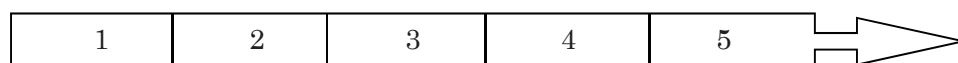
3. 学習者がリスニングをする際に，教材のトピックについてもっている関連知識を使って内容を予測するよう指導できる。



4. リスニング・ストラテジー（要旨や特定の情報をつかむなど）の練習と向上のために，様々な学習活動を立案し設定できる。[N]

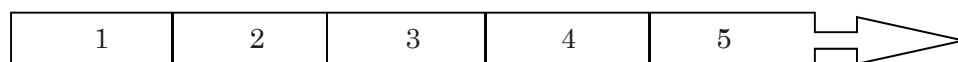


5. 学習者に英語の話し言葉の特徴に気づかせるような活動を立案し設定できる。
[N]

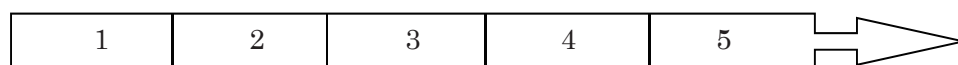


D. リーディング活動 (Reading)

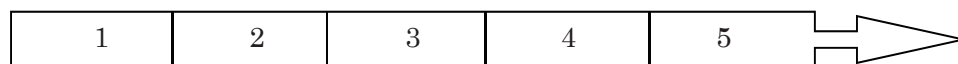
1. 学習者のニーズ，興味・関心，到達度に適した教材を選択できる。



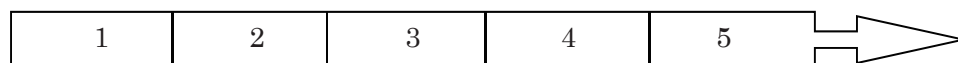
2. 学習者が教材に関心が向くよう、読む前の活動を設定できる。



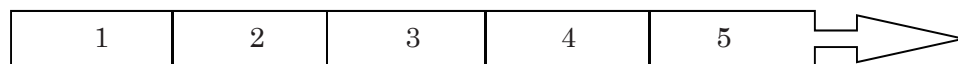
3. 学習者が文章を読む際に、教材のトピックについて持っている関連知識を使うよう指導できる。



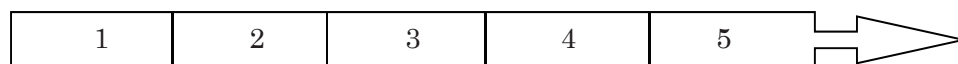
4. 文章に応じて、音読、黙読、グループリーディングなど適切な読み方を導入できる。



5. 読む目的（スキミング、スキヤニングなど）に合わせ、リーディング・ストラテジーの練習と向上のために様々な活動を展開できる。[N]



6. 学習者に難語や新語に対処する様々なストラテジーを身につけさせるよう支援できる。[N]

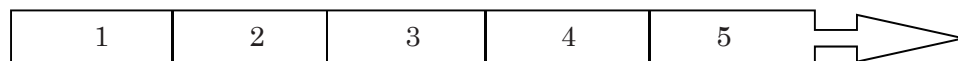


7. リーディングとその他のスキルを関連づけるような様々な読んだ後の活動を選択できる。[N]

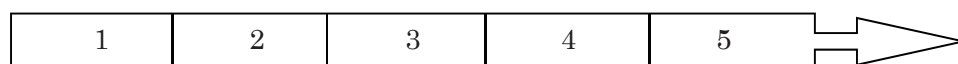


E. 文法 (Grammar)

1. 学習者に適切な文法書や辞書を提示し，具体的にそれらを引用して説明を行い，またそれらを学習者が使えるように指導できる。



2. 文法は，コミュニケーションを支えるものであるとの認識を持ち，使用場면을提示して，言語活動と関連づけて指導できる。

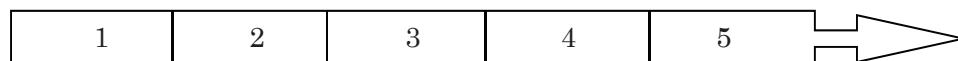


F. 語彙 (Vocabulary)

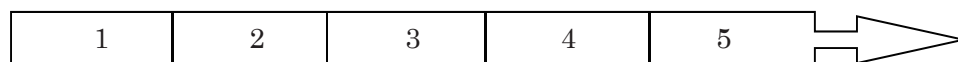
1. 文脈の中で語彙を学習させ，定着させるための活動を設定できる。



2. ロングマンの辞書の語彙定義に使われる基本2000語を理解し，それらを使ってさまざまな活動を設定できる。[N]

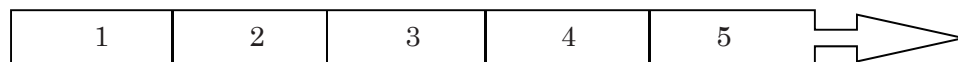


3. 使用頻度の高い語彙・低い語彙，あるいは受容語彙・発信語彙のいずれであるかを判断し，それらを指導できる。[N]



G. 文化 (Culture)

1. 英語学習をとおして，自分たちの文化と異文化に関する興味・関心を引き起こすような活動を設定できる。



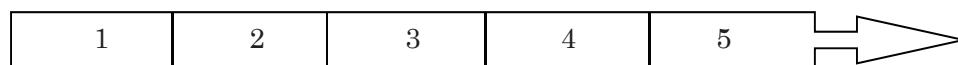
序文

学習者のために活用できるアイデア，指導法，参考教材など，教師が利用できる様々な教授資料の入手に関する項目を扱う。具体的な内容は以下の通りである：

- ・ 教科書および教材の選択
- ・ 言語活動で利用できる教材の選択
- ・ 教科書以外の素材（文学作品，新聞，ウェブサイトなど）の選択
- ・ 辞書や参考書
- ・ ICT を使った教材
- ・ 学習者自身による自主教材


1. 学習者の年齢、興味・関心、英語力に適した教科書や教材を選択できる。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---



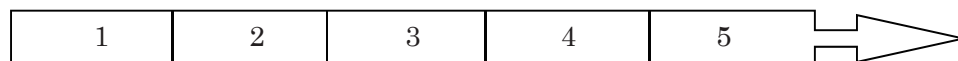
2. 学習者の英語力に適した文章や言語活動を教科書から選択できる。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---



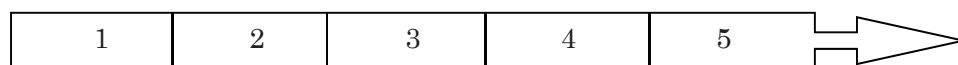
3. 教科書以外の素材（文学作品、新聞、ウェブサイトなど）から、学習者のニーズに応じたリスニングとリーディングの教材を選択できる。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---



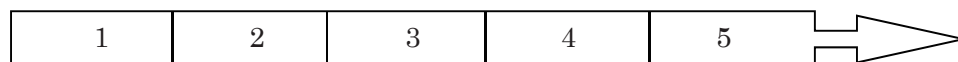
4. 教科書付属の教師用指導書や補助教材にあるアイデア、指導案、教材を利用できる。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---



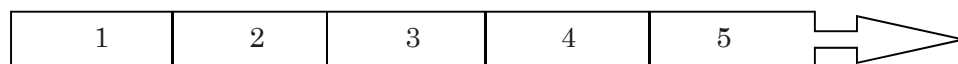
5. 学習者に適切な教材や活動を考案できる。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---



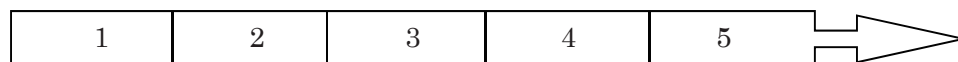
6. 情報検索のためにネットを使えるように学習者を指導できる。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---



7. 学習者に役に立つ辞書や参考書を推薦できる。[N]

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---



序文

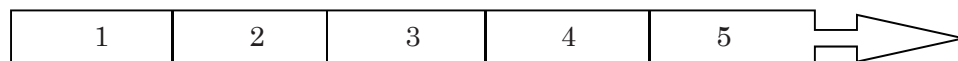
授業計画のテーマとして、どのような理由で学習目標を設定し、どのような内容を、どのような方法で教えるのかという項目に焦点を当てる。具体的な内容は以下の通りである：

- ・ 学習目標の設定
- ・ 授業内容の設定
- ・ 授業計画の設定
- ・ 授業計画に沿った学習活動の設定

A. 学習目標の設定 (Identification of Learning Objectives)

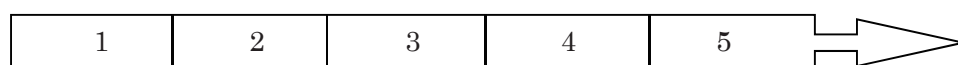
1. 学習者のニーズと興味・関心を考慮し，学習指導要領の内容に沿った学習目標を設定できる。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---



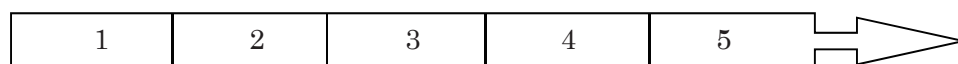
2. 年間の指導計画に即して，授業ごとの学習目標を設定できる。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---



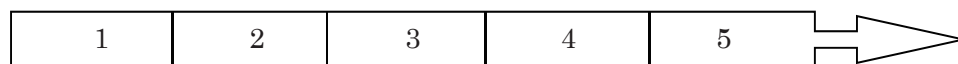
3. 学習者の意欲を高める目標を設定できる。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---



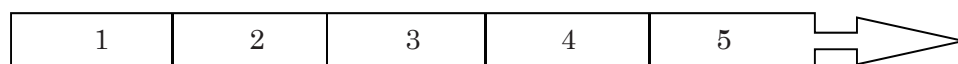
4. 学習者の能力やニーズに配慮した目標を設定できる。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---



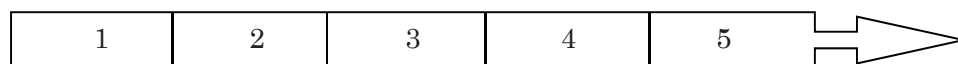
5. 学習者に学習の振り返りを促す目標を設定できる。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---



B. 授業内容 (Lesson Content)

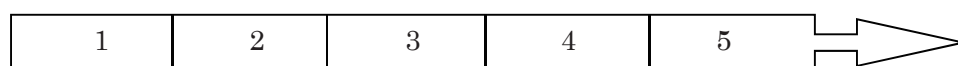
1. 「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」の4技能が総合的に取り込まれた指導計画を立案できる。



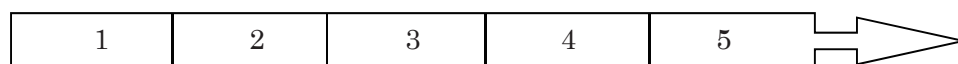
2. 言語や文化の関わりを理解できるような活動を立案できる。



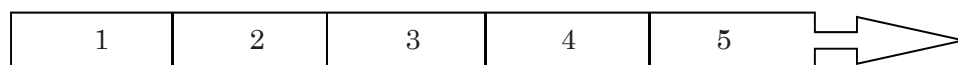
3. 文法学習や語彙学習をコミュニケーション活動に統合させた指導計画を立案できる。



4. 目標とする学習活動に必要な時間を把握して、指導計画を立案できる。



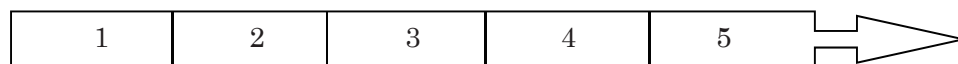
5. 学習者がこれまでに学習した知識を活用した活動を設定できる。



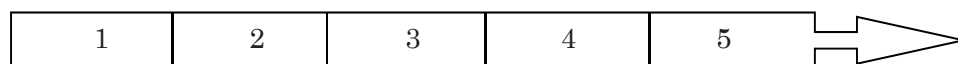
6. 学習者のやる気や興味・関心を引き出すような活動を設定できる。



7. 学習者の学習スタイルに応じた活動を設定できる。

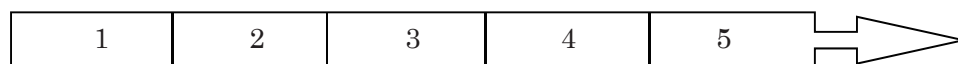


8. 学習者の反応や意見を，授業計画に反映できる。

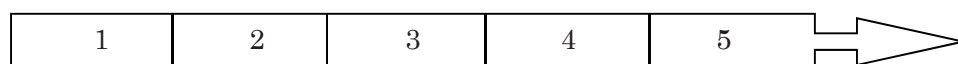


C. 授業展開 (Lesson Organization)

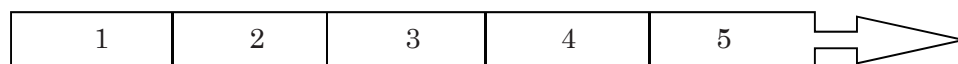
1. 学習目標に沿った授業形式（対面式，個別，ペア，グループなど）を選び，指導計画を立案できる。



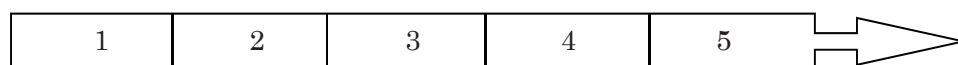
2. 学習者の発表や学習者同士のやりとりを促す活動計画を立案できる。



3. 英語を使うタイミングや方法を考慮して，授業計画を立案できる。



4. 指導教員やALTとのチームティーチングの授業計画を立案できる。[N]



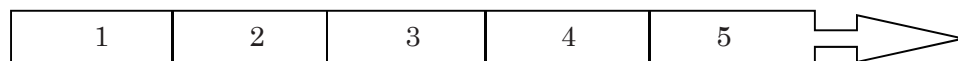
序文

教師は、一貫性はあるが、柔軟な姿勢で活動の順序を設定したり、学習者の既習事項に配慮したり、しかも一人一人の言語運用能力に対応できる能力を持たなければならないという観点に立ち、実際に授業を行う際に教師に求められる技能に関する項目に焦点を当てる。具体的な項目は以下の通りである：

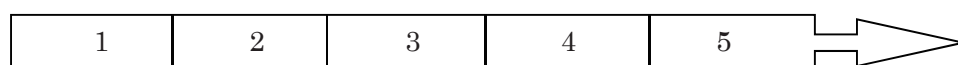
- ・ 授業計画の実施
- ・ 授業内容の対応
- ・ 学習者とのインタラクション
- ・ 授業運営（学習活動の形態の選択と提供，教育機器の運用力など）
- ・ 英語を使った授業展開

A. レッスン・プランの使用 (Using Lesson Plans)

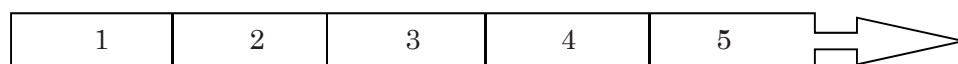
1. 学習者の関心を引きつける方法で授業を開始できる。



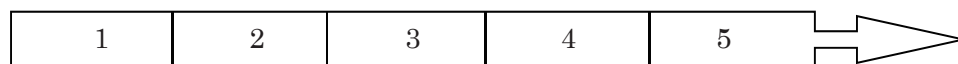
2. 指導案に基づいて柔軟に授業を行い，授業の進行とともに学習者の興味・関心に対応できる。



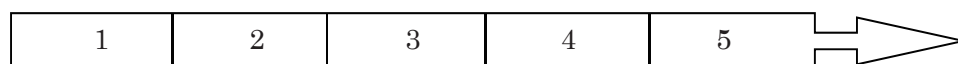
3. 学習者の集中力を考慮し，授業活動の種類と時間を適切に配分できる。



4. 本時をまとめてから授業を終了することができる。

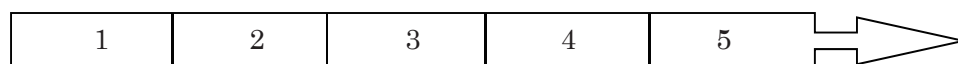


5. 予期できない状況が生じたとき，指導案を調整して対処できる。[N]



B. 内容 (Content)

1. 授業内容を，学習者の持っている知識や身近な出来事や文化などに関連づけて指導できる。

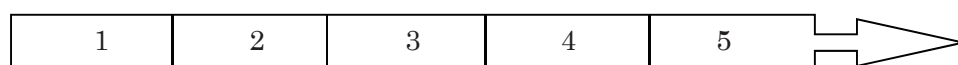


C. 学習者とのインタラクション (Interaction with Learners)

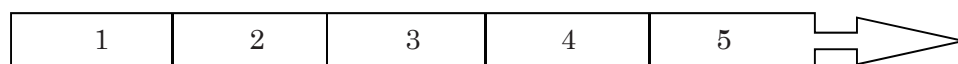
1. 授業開始時に、学習者をきちんと席に着かせて、授業に注意を向かせるよう指導できる。



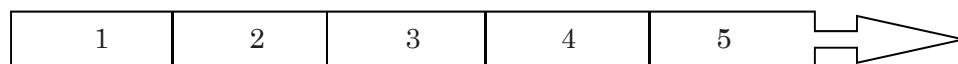
2. 学習者中心の活動や学習者間のインタラクションを支援できる。



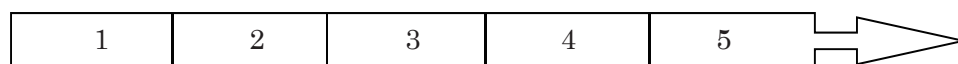
3. 可能な範囲で、授業の準備や計画において、学習者の参加を奨励できる。



4. 学習者の様々な学習スタイルに対応できる。[N]

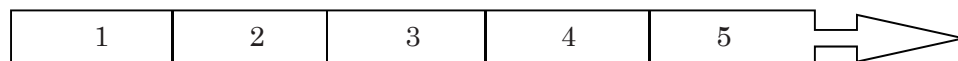


5. 学習者が学習ストラテジーを適切に使えるように支援できる。[N]

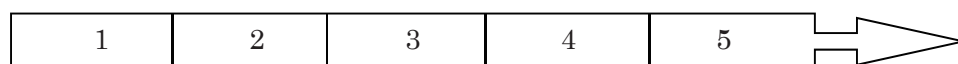


D. 授業運営 (Classroom Management)

1. 個人学習，ペアワーク，グループワーク，クラス全体などの活動形態を提供できる。

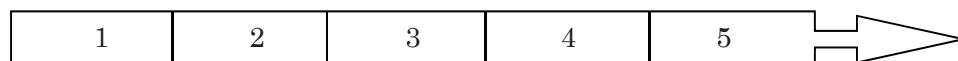


2. フラッシュカード・図表・絵などの作成や視聴覚教材を活用できる。

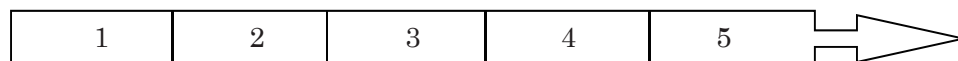


E. 教室での言語 (Classroom Language)

1. 英語を使って授業を展開するが，必要に応じて日本語を効果的に使用できる。



2. 学習者が授業活動において英語を使うように設計し指導できる。



序文

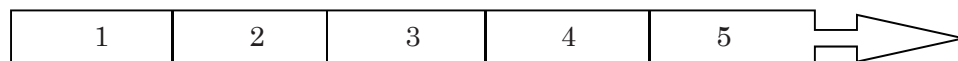
自立とは状態であり、自律は能力である。ここでは、学習者を自立させるために、学習者の自律性の向上に焦点を当てる。これは学習者が自分の学習に責任を持って取り組む能力の向上を目標として、学習者が単独で行う学習だけでなく、学習者同士が協同で行なうものも含まれる。具体的な内容は以下の通りである：

- ・ 自律するための学習活動への支援
以下は【現職英語教師編】で扱う。
- ・ プロジェクト学習
- ・ ポートフォリオ学習
- ・ インターネットを利用した学習
- ・ 言語学習に関連した特別活動（修学旅行や国際交流活動など）

A. 学習者の自律 (Learner Autonomy)

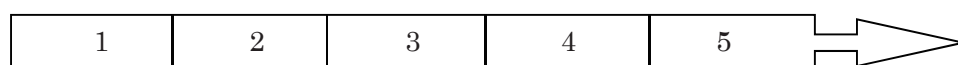
1. 学習者が各自のニーズや興味・関心に合ったタスクや活動を選択するように支援できる。[N]

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---



2. 学習者が自分の学習過程や学習成果を自己評価できるように支援できる。[N]

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---



B. 宿題 (Homework)

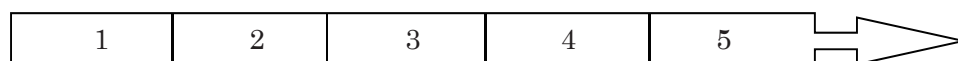
1. 学習者にとって最も適した宿題を設定できる。[N]

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---



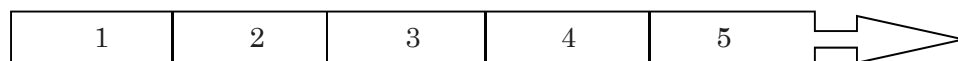
2. 学習者が自主的に宿題を進めるのに必要な支援を行ない、学習時間の管理の手助けができる。[N]

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---



3. 妥当で明確な基準に基づいて宿題を評価できる。[N]

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---



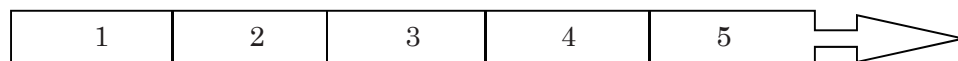
序文

教育の成果に関して、何を、いつ、どのように評価するかという点に焦点を当てる。また、学習支援と教師自身の指導改善のために、評価している時点でもたらされる情報をどのように利用するかということも扱う。具体的な内容は以下の通りである：

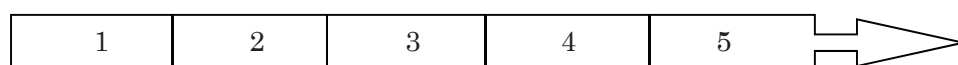
- ・ 筆記試験，実技試験などの評価ツールの考案
- ・ 評価方法
- ・ 自己評価と相互評価（【現職英語教師編】）
- ・ 言語運用能力に関する評価
- ・ 異文化理解に関する評価
- ・ 学習者の誤りへの対処

A. 測定法の考案 (Designing Assessment Tools)

1. 授業の目的に応じて、筆記試験、実技試験などの評価方法を設定できる。[N]

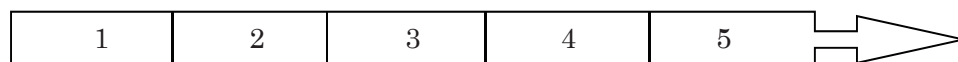


2. 学習者の授業への参加や活動状況を観察し評価する方法を立案し使用できる。
[N]

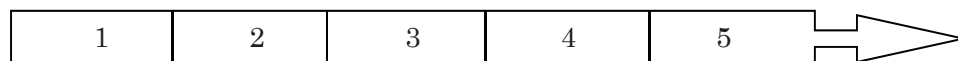


B. 評価 (Evaluation)

1. 学習者の英語運用力が向上するように、本人の得意・不得意分野を指摘できる。[N]



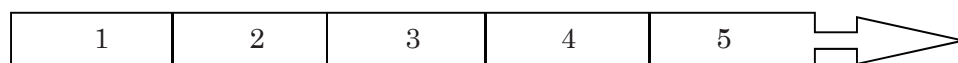
2. 学習者や保護者などにわかりやすい形式で学習者の学習成果や進歩を記述できる。[N]



C. 自己評価と相互評価 (【現職英語教師編】)

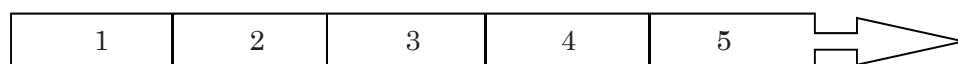
D. 言語運用 (Language Performance)

1. 話したり書いたりする能力を適切に評価できる。[N]



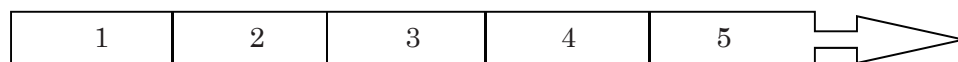
E. 国際理解(文化) (Culture)

1. 日本の文化と英語圏を中心とした文化を比べ、その相違への学習者の気づきを評価できる。



F. 誤答分析 (Error analysis)

1. 学習者の誤りを分析し、建設的にフィードバックできる。



学習・実践記録

何のために記録を残すのか

- 自己評価記述文の判断の根拠を示すために

学習や実践の記録は、証拠として自己評価（省察）の裏付けになります。記録表や保管用ファイルに何を含めるかは自分で決めてください。どんな記録が Can-do 記述文に対する自己評価の裏付けとなるかは、自分で判断することが最善であり、時には自分しか判断できないことがあります。

- 授業力の向上を確認するために

学習者の潜在能力をさらに発揮させるために、指導方法を状況に応じて変えるとしします。その変化を記録し、一定の期間を置いて記録を見直すと、自分の授業力が向上していることに気づきます。一方で、その記録は「授業計画」や「授業実践」のセクションにある記述文に対する自己評価への裏付けになります。

- 授業や研修実績のエビデンス集として

教職課程にいる学生の場合は、実習校での指導担当教員、大学の教科法や教職指導担当者に対して、現職の教員の場合には、勤務校の指導教員、勤務校の校長等管理職、教育委員会などに対して、自分の実績の裏付けをする記録集にもなり得ます。どの目的で使うかは、自分の置かれている環境の文脈で決めてください。

ドシエは、自分が適切だと思うものを加えていくことによって、次第に多様な内容を含むリストとなり、教職のプロとしての成長のための詳細で有効な記録となります。この記録を作成するにつれて、ある一定の種類の情報証拠として選んだ理由や、個々の証拠が自分の知識や実践力の向上に対してどのような役に立っているのかを省察しようとする気持ちになると考えられます。1つの証拠が、自分が達成した事柄のいくつかの局面を説明しているから数項目の Can-do 記述文に関係する、と感じることがあるかもしれません。時間をかけてエビデンスを構築すれば、各記述文の矢印ブロックの広い領域に色を塗ることができるでしょう。自分の目標を明確にすることができる知識や能力を向上させるのは、こうして振り返る（省察する）ことから生まれます。

学習・実践記録（ドシエ）に含めるべき事項

下記のリストをご覧ください。このリストで示されたすべての証拠を収集することなどは不可能かもしれません。しかし、学習・実践記録を作成し、それを継続的に更新していくために、以下の事項を証拠として含めることをお勧めします。

A. 具体的な学習・実践の記録

- ・ 英語学習（能力試験の受験など）
- ・ 授業実践（模擬授業，授業観察，研究会の参加など）
- ・ 保管資料としての，能力試験結果，模擬授業指導案，授業省察日誌，観察記録，実習日誌，などのファイル

B. 継続的な学習・実践の記録

記録表には A に該当しない継続的な英語学習と授業実践を記載（家庭教師，塾講師，課外ボランティア，学校行事補助，海外研修・留学など）

A. 学習・実践の記録

※英語の学習，英語の授業実践について記録してください（例：模擬授業，授業観察，研究会の参加，英語の資格試験受験など）。資料の有無も記入してください（例：模擬授業指導案，授業の振り返り日誌，授業観察の記録，実習日誌，英語の資格試験結果など）。資料の実物を添付する必要はありません。

実施日	学習・実践事項	概要	コメント	資料の有無
(例1) 2014年 7月25日	TOEICの受験	TOEICの公開テストを受験。	前回550，今回610。目標どおり，リスニング50以上アップ。	○
(例2) 2014年 9月25日	第1回模擬授業	英語科教育法の授業で，2人1組で20分間の模擬授業を実施。対象：中1。各担当10分。	準備不足のため，時間内に指導案の内容を終えることができなかった。次回は，事前に時間を計って，十分に準備をして臨みたい。	○

--	--	--	--	--

--	--	--	--	--

B. 継続的な学習・実践の記録

※A に該当しない継続的な英語の学習，英語の授業実践について記録してください（例：家庭教師，塾講師，課外補習ボランティア，学校行事補助，海外研修・留学など）。

実施 期間	学習・実践事項	概要	コメント
(例3) 2014年 4月1日 ~2015年 3月31日	英語の家庭教師 (中学2年生1名)	週1回2時間，中学2年生 を対象に，英語の家庭教師 をした。前半1時間は，単 語テスト，教科書の解説， 音読などにあて，後半1時 間は問題演習と解説にあ てた。	最初は，なかなか上手に教 えることができなかった が，生徒の得意な学習方法 が分かり，生徒に合った教 え方をすることができる ようになった。

--	--	--	--

--	--	--	--

用語解説

(五十音順)

アイコンタクト (eye contact)

教育学・心理学の視点から言えば、単なる物理的な視線接触を越えて、親と子、教師と生徒、人と人などの二者間で気持ちが通じ合うことの実証的な指標となる。

アイ・シー・ティー (ICT)

Information, Communication, Technology の頭字語である。情報やコミュニケーションの技術である。それを授業にどのように使うかということが最近、実践・研究されている。

アクション・リサーチ (action research) [A] [N] [P] [SP]

現場に根ざした実践研究の手法の一つ。教師が教育問題を他の教師や生徒等と協力しながら、問題を発見し、それに関する実態を調べ、調査結果から授業改善の方向を、一定期間内に実践と省察を繰り返し、具体的な解決の対策を立てる。さらに対策を実践し、計画を記録し、効果を検証して必要に応じて対策の変更を加える。つまり、「計画、実践、観察・省察、計画の修正、実践、観察・省察」の流れに沿って実践研究を行う手法である。

アプローチ (approach)

よく混同されるメソッドとの比較で解説する。メソッドは教え方がプレ・パッケージされた一定した指導法なのに対し、アプローチは対象言語や第二言語習得理論、言語学習理論に対する個人の教育観や信念に基づいた指導法。したがって、文法訳読はメソッドで CLT はアプローチ。

言い直し (recast) [Open]

学習者の不完全な発話を受けて、教師が文法的・意味的に正しく言い直すこと。

corrective recast (正しい言い直し) ととも constructive feedback (建設的フィードバック) ともいう。不足の語句を補充して文や文章を完成させたりする expansion (拡大) も含まれることがあり、広義の error treatment (誤りの対処法) に含まれる。

意味の交渉 (negotiation of meaning) [N] [A] [SP]

コミュニケーションの場面で、相互理解に支障をきたさないよう正しく意志や意味を伝え合うためのやりとりを「意味の交渉」と呼ぶ。①相手の言うことが理解できない場合に「繰り返してもらおう」、②こちらが言ったことが正しく伝わったかどうかを知りたい場合に「相手に確認する」、③こちらが言ったことが相手に理解されない場合に「自分の発言を修正したり、言い換える」等の方法がある。

インタラクション／相互交流 (interaction) [Open]

学習者と教師または学習者同士で、メッセージを伝え合う相互交流活動として授業で使われる。これは相互交流活動が言語能力を発達させるという考えで、タスク中心の指導で用いられる。この活動では、定型対話による言葉のやりとりから、I beg your pardon? Could you say it again, please? Please say it slowly. What does that mean? などの聞き返しのための表現を指導したりして、学習者同士のコミュニケーションを促進し、自由度の高いやりとりへと移行させ、言語習得を促進させようと考えられている。

インフォメーション・ギャップ (information gap) [Open]

ある情報において、話し手と聞き手が持っている情報の量的または質的ギャップのこと。このギャップを人工的に起こし、そのギャップを埋めさせる活動がインフォメーション・ギャップを利用した活動と言える。例えば、学習者を話し手と聞き手に分け、聞き手の情報を話し手より少なく与えて、コミュニケーションをさせ、2人で協力して、そのインフォメーション・ギャップを埋めさせる活動は、定型的な活動より、自由度の高いやり取りが可能となる。

ウィキペディア (Wikipedia)

ウィキペディア財団が運営する多言語オンライン百科事典。無料で見ることができるが、項目によっては必ずしも正確でない場合がある。

ウェブ上での(仮想)学習環境 (virtual learning environments) [Open]

インターネットのウェブサイトを利用した仮想学習環境のこと、つまり、eラーニングによる学習環境である。バーチャルとは「実質上の」という意味であるので、「実質」ではない。したがって、仮想学習環境とは、対面による教育環境と異なることを意味する。

エイ・エル・ティー ALT (Assistant Language Teacher)

The Japan Exchange and Teaching Program (JET Program) によって雇用される外国語母語話者の補助教員。

オーセンティック (authentic)

外国語教育では、自然な話し言葉・書き言葉の特質をもつ場合に使われる。教育において学習者のレベルによって語彙や文法等に制約が必要な場合、authenticity (自然さ) と teachability (learnability) (教えやすさ・学びやすさ) のどちらを優先させるかという問題が生じることがある。

オーラル・アプローチ (oral approach)

audio-lingual method の別称で、行動主義学習理論と構造主義言語理論を中心とする言語習得理論の一つ。

音の同化 (assimilation)

前後の語が子音で終わり子音で始まる場合、前の子音が後の子音に影響されて変化する現象 (例: that/p/man, bad/b/boy, ten/m/pens, last year, Won't you ... ?, Did you ...?, this year, Is she ... ?, Does she ...?等)。

音の連結 (linking)

語の最後の音と次に来る語の最初の音が連結する音変化の現象 (例: an apple, half an hour, find out 等)。

学習者の自律 (learner autonomy) [N] [A] [P]

学習者の自律の定義として最も知られているのは「自分自身の学習に責任を持つ能力」(Holec, 1979)である。その支援のためには、学習者の目的や方法を決めたり、到達度を評価するなど、これまで教師が行っていた多くの学習の過程に、学習者自身が部分的あるいは全面的に関わることを意味する学習環境が自律を支援するものであれば、学習者の内発的動機づけも高まり、自律は動機づけとも深い関わりがある。(『新しい時代の英語科教育の基礎と実践』より)

学習者へのフィードバック (learner feedback) [Open]

教師やクラスメートから提供される学習の結果や経過についての情報。すでに習得された事項や習得できていない事項に関して学習者自身が省察・分析・評価を行うのに必要。学習者が、教師や学習プロセスをモニターしている者に対して、自分が言語をどの程度使えるようになったかについて報告することも含まれる。ピア・フィードバックは、学習者同士が、対話や相手が書いた文章などについて修正や批判を行い合うことを指す。

学習スタイル (learning style)

学習活動または学習過程に認められる個人固有の特徴で、外から観察できるものだけでなく、内面的なものもあり、学習の個人差を質的にとらえる場合に重要である。

学習ストラテジー／学習方略 (learning strategies) [A] [P] [SP]

学習ストラテジーとは、新しい情報を理解したり、学んだり、保持するのに助けるために学習者が使う、特別な思考や行動である。学習ストラテジーは学習スタイルと密接な関係があり、学習ストラテジーを習慣的に多くの場面で使うことによって、学習スタイルが形成されるという考え方もある。学習ストラテジーは取り組むべきタスクや環境などによって異なり、効果的に使えるように指導することで指導ストラテジーの使用を変

化させることができる。（『新しい時代の英語科教育法の基礎と実践』より）

観点別評価

日本では生徒の成績評価方法として、教科の成績を数値化して示す「評定」と「コミュニケーションへの・関心・意欲・態度」、「表現の能力」、「理解の能力」、「言語や文化についての知識・理解」のように4つの観点を基本として示す「観点別学習状況」という2つの評価法を採用している。

教育課程（Curriculum）

学校教育の目的や目標を達成するために教育の内容を児童生徒の心身の発達に応じ、授業時数との関連において総合的に組織した学校の教育計画である。各学校が教育課程を編成するが、公教育の観点から踏まえねばならない原則が存在する。日本では教育課程編成の規準となるものが「学習指導要領」（Course of Study）である。

クリル／内容言語統合型学習（CLIL / Content and Language Integrated Learning）

[Open]

第1言語（通例母語：L1）とともに、学習の目標言語（第2言語：L2）を用いて教科科目を教える方法である。目的はL1とL2を使用することによって、諸概念の操作能力を育成することであり、評価は教科内容の理解が重視される。しかし、教科内容理解という意味のある環境における言語使用は、学習効果が高いとされる。教科は、芸術、体育などから生物・環境などの理系科目、歴史などの社会系科目など幅が広い。

形成的評価（formative assessment）

指導の途中で、それまでの内容を学習者がどの程度理解しているか把握し、その後の学習に役立てるために評価すること。

言語活動（language activities） [Open]

ある学習目的達成のために学習者が自分の知識・機能を動員して遂行するように設定されたタスク（作業・活動）を行うことによってコミュニケーション言語能力（Communicative Language Competences）を習得させるための学習活動。

言語材料

学習指導要領でいう言語材料は、「音声」、「文字及び符号」、「語、連語及び慣用表現」、「文法事項」で構成されている。

言語熟達度（language proficiency） [Open]

学習の結果としての言語をどの程度運用できるようになったかどうかの能力を指す。一方、どの程度うまく理解できたり、話せたり、読めたり、書けたりできるかという程度も表す。言語熟達度は、熟達度レベルを測定する指標に基づくテストによって測定される。

行動志向アプローチ（action-oriented approach）

言語使用者や学習者を、「与えられた条件・特定の環境または行動領域の中で、課題を遂行することが要求されている社会の成員」とみなす言語教育観。行動中心主義ともいう。この理念は、「ヨーロッパ言語共通参照枠（CEFR）」の中核の1つで、「知っている」とか「わかる」というレベルではなく、実際に求められていることができるかを重視する。そのため、CEFRのA1～C2のすべての記述文が「～できる」というCan-do Statementsになっている。

行動の規範（norms of behaviour）

挨拶の仕方、食事の作法、人への接し方など、ある文化に属する人が共通して行っている行動様式のこと。異文化間の交流においては、「行動の規範」の差異が、誤解やコミュニケーションの齟齬を招くことが往々にしてある。

国際理解（international understanding） [Open]

他国・他文化の理解や相互依存関係の理解を意味する。各国家や各民族の人権や多様性を尊重して国際的に平和共存の社会を形成する市民を育てるための教育を国際理解教育（Education for International Understanding）と言う。

誤答分析 (error analysis) [N] [A] [P]

学習者による誤りとその原因を特定し、分析すること。この研究成果は、学習者が学習過程のどの辺にいるのか、どのような言語学習方略を使用しているのかを評価し、改善がどの点とどのようになされるかを示唆するのに用いられる。

コミュニケーション・ランゲージ・ティーチング (communicative language teaching)

言語教育の目標はコミュニケーション能力であることを強調する指導法。コミュニケーション能力 (Communicative Competence) とは 1970 年代に Hymes が提案した概念で、言語そのものに関する知識だけではなく、言語を運用する上での能力、つまりメッセージを伝えたり理解したりする能力や、ある特定の場面、対人関係の中で意味を交渉する能力のことである。Savignon はコミュニケーション能力とは話し言葉によるコミュニケーション能力だけではなく、書き言葉においても同様に、場面に適切な表現を選択して使用する能力であるといっている。その後、Canale & Swain が提唱した 4 つの構成要因 (文法能力、談話能力、社会言語能力、方略能力) などのようにコミュニケーション能力は多くの言語学者や教育者によって議論されてきた。(『新しい時代の英語科教育の基礎と実践』より)

コミュニケーション・ストラテジー (communication strategy) [Open]

言語知識の不足により、相手の発話が理解できない、言いたいことが伝わらないというような場合に、それを乗り越えるために用いられる様々な方略。相手の発話を理解する方略として、理解できない語句について質問したり、繰り返しを求めたりする。相手に伝える方略として、①表現したい事柄を他の表現で言い替えたりする (言い替え)。②母語から逐語訳したり、母語をそのまま使ったりする (借用)。③伝えたい内容を省略したり、やや異なる内容を表したり、あきらめたりする (回避) などがある。その他にジェスチャーなどの非言語スキルを用いることもある。

自己評価 (self-assessment) [Open]

学習者が自分の能力、知識、学習ストラテジー等を使えるかを自己評価することを意味する。EPOSTL の自己評価記述文は、Context (教育環境)、Methodology (教授法)、Resources (教授資料の入手先)、Lesson Planning (授業計画)、Conducting a Lesson (授業実践)、Independent Learning (自立学習)、Assessment of Learning (評価) の 7 分野 195 項目の Can-do 記述文で構成されている。

社会文化的学習 (sociocultural learning)

学習は個人的なものだけではなく、社会的なものでもある。学習者間の協同学習であり、課題を協同して解決していく学習方法である。例えば、Vygotsky の発達最近接領域 (Zone of Proximal Development) においては、学習者が教員や友人などの助けがあれば、学習が可能になる。

社会文化的能力 (sociocultural competence)

言語と深く結びついている特定の社会や文化に関する特徴を理解し、適切に使用することができる能力。状況や場面に合った言語使用を実現するために不可欠である。社会文化的能力が乏しければ、流暢に話せたとしても、不適切な言語使用者とみなされる可能性がある。

シャドーイング (shadowing)

ネイティブの音声 (肉声あるいは録音) を聞きながら、それを影 (shadow) のように後から追いかけて口に出し、同じように発音する英語学習法で、もともとは通訳を目指す人々がよく使う訓練法。

情意的ニーズ (affective needs) [Open]

言語を学習する動機や学習活動に参加する学習者の自発性などに影響を与える。安心感をいかに必要性、自分の考えや感情を表現する必要性、自己実現の必要性などを含む。

情意フィルター (affective filter)

Krashen (1984) の *The Natural Approach* で提唱された Affective Filter Hypothesis (情

意フィルター仮説)によれば、言語習得は学習者の情意に影響され、不安、自信喪失のような負の感情は言語習得を妨げるといふもの。

ショー・アンド・テル (show & tell)

生徒に級友を前にして、持参したものを見せて英語で説明させる指導技術。

シラバス (syllabus)

一定期間内に何を指導内容の構成単位としてどのような順序で教えるのかを示したものの。文法と構文を中心に組み立てる「文法・構造シラバス」(Grammatical-Structural Syllabus)、旅行・病院・学校・電話など使用場面に基づいて組み立てる「場面シラバス」(Situational Syllabus)、表現したい意味に加えて実際に言語を使ってコミュニケーションを行う際の挨拶・質問・感謝などの機能に基づいて組み立てる「概念・機能シラバス」(Notional-Functional Syllabus)等がある。

自立学習 (independent learning) [Open]

自立的学習者を育てるための学習のこと。自立的学習者は自分で学習できるようになった学習者のこと。自立的とは状態を指し、自律的学習者は自分を律して学習する者のことであり、英検協会は、英検2級を自立的英語学習者と定義し、英検準1級以上を自立的英語使用者と定義している。

スキット (skit)

語彙、文法、機能(function)等を含んでいる新教材導入用寸劇

スキミング (skimming) と スキャニング (scanning)

前者は速読の一種で段落や文章の大意を把握するような読み方。後者は速読の一種で文章の中から特定の情報を探すような読み方。

スキヤフォルディング／足場作り (scaffolding) [N] [A] [P]

一般的には、生徒の学力を超えたタスクを行わせる時に生徒に与える支援であるが、言語学習においては適切かつ社会的・協働的な枠組みによって成果が左右されるという心理学者Brunerの理論に基づく。

ストーリーテリング (storytelling)

学習手段として長い間、生徒の学習効果や情緒安定に役立つと考えられて、あらゆる年齢層に対応できることから、個々の生徒の表現性や思考・感情を正確・明瞭に伝える能力を養う目的で用いられ、近年、日本では小学校の教育に応用されることも多い。

スモールトーク (small talk) [Open]

授業に入る前に教師側から行う簡単な「語りかけ」のこと。教室内で英語を使う雰囲気醸し出すために、学校行事や教師・生徒等に関する個人的な話題を見つけて、生徒がそれまでに学習した語彙や表現を使って、生徒たちとことばを交わしながら行うことにより、アイス・ブレイキング的な役割として、教室英語を活性化するきっかけとなる。

全身反応教授法 TPR (Total Physical Response)

教師の与える指示に学習者が全身で反応することを求めるもので、言語活動と全身動作を連合させることが、その表現の定着に役立つという考え方。

他者性 (otherness)

自分とは異質な文化、価値観、考え方などに対して用いられる概念。異文化間能力を備えるためには、自文化中心の物差しで「他者性」を判断するのではなく、「他者性」に気づき、「他者」の持つ視点を取り込んだ上で、新たな視点を構築することが求められる。

タスク／課題 (task) [Open]

学習者が教室の中で言語を使って行う作業や活動をタスクと呼ぶ。また、学習者が実社会で遭遇すると想定される仕事や課題もタスクと定義される。タスク中心のシラバス(task-based syllabus)では、①意味を重視する、②コミュニケーションを行って解決すべき課題がある、③特定のタスクの完成を重視する、④実社会との関わりがある、⑤評価はタスクの完結によって行うとされる(Skehan, 1998)。

タスクベースト・アプローチ (task-based approach)

対人間のコミュニケーション・やりとりを通して課題 (task) 解決を求める指導法。

Task-based language teaching とも言う。

達成目標水準 (attainment target levels) [Open]

教育機関や地域や国家により設定された学習者の言語運用の水準。これらは数値や ABC (日本ではあいうえお) 順で示される。しばしば言葉の説明もある。達成された言語運用の水準 (すなわち、ある一定の目標が達成された) か目標とした言語運用の水準を示すのに学習者自身だけでなくカリキュラム立案者や教師によっても使用できる。

中間言語 (interlanguage)

外国語を学ぶ過程で、学習者が独自に使う実際の目標言語とは様々な点で違った体系を持った言語のこと。例えば、go の過去形である goed や wanted などは中間言語で、母語話者の子供にも見ることができる。中間言語体系は、習得レベルや学習内容、母語などの影響などによって学習者ごとに質が異なる。また、同一の学習者でも、発達段階によって、異なる中間言語を用いる。この特異な変種は、目標言語の標準形と異なり、誤り、平易化、負の転移、等を含みやすい。

ディクトグロス (dictogloss)

長めのまとまった文章を教師が普通の速さで数回読み、学習者が聞き取ったことを持ち寄り、グループで協力してテキストを復元させる活動。

ディスフルエンシ (disfluency)

発話中に言いよどむ現象であるが、気づかれないような軽度の場合から理解不能に至るまで幅があり、ほとんど誰でも時と場合により disfluency になることがある。Filler words (uhm, er, like など) の使い過ぎも一種の disfluency である。

認知的ニーズ (cognitive needs) [Open]

知識を獲得したり、能力を開発したり、タスクを完成させたりするために、省察、問題解決、解釈等の過程や方略を使用する学習者の必要性。これらは学習者がどのように教材や活動に関わるかに影響を与える。

評価 (assessment) [Open]

様々なテストや査定に関する総称的用語。学習者の達成度の形成的証拠と総括的証拠を提供し、公式的または非公式的な方法で利用される。試験やテストは公式的評価の例である。ペアワークの対話を聞きとること、クラスでの問答、クイズ等は非公式的評価の例となる。評価は定まった基準に照らして成績をつける。形成的評価は、実績に関する書面または口頭で表明された達成記録、ポートフォリオ、実績のプロフィール、can-do リスト、コメントなどの形をとる。総括的評価は、成績、評点、良、優、不可等として表現される。

評価ツール (assessment tools) [Open]

言語運用を測る手段。いくつかの形態がある。テスト (Tests) : 教室の中、授業中、(中間、期末、年度末などの) 固定した時期や学習単元の後などに実施される。これらは、内部的あるいは外部的に用意されたり採点されたりする。そしてほとんどは模範解答が口頭か書面でなされる。試験 (Examinations) : これらは、一連のテストの形をとり、しばしば公式的資格を有している。公式的に実施され、外部的に認知されている。コースワーク、日記、学習記録 (Coursework / Diaries/Logbooks) : これらのタイプの評価は、一定の期間にわたり学習者により完成された作業で決定される。また、進行中の学習過程として指導するために形成的に使用したり、何を探求・学習して、達成したかの総括的にも使用できる。

ビンゴ・ゲーム

語彙学習の方法として利用される。5×5 のマス目に事前に与えられた単語を生徒が書いておき、教師が読み上げる単語と同じものがあれば選んだ印をつけ、その印が早く縦、横、または斜めに連続して5つ並んだ人が勝つゲーム。

複言語主義 (plurilingualism)

異言語・異文化と接触する機会が増えている現代では、複数の言語体験と複数の文化体験が相互に作用し合って共存する状況が現出している。このような複合社会においては、個人が有する複数の言語を用いる能力が、たとえ個々の外国語能力が高いレベルになくても、相互に支える社会の融和と協調に資するという理念に立脚する。

複文化主義 (pluriculturalism)

言語は、文化の主要な側面であるのみならず、文化を体現する手段であるという理念に立脚する。個人の複数の異文化接触の体験は、言語能力と共に、文化と言語が相互の作用し、統合された能力として機能すると捉える。

ブレインストーミング (brainstorming)

各人が自由に発想を出し合う会議技術。1939年、A. F. Osborne が米国の広告会社で初めて試みた。

プロジェクト学習 (project/problem-based learning : PBL) [N] [P] [SP]

学習者が与えられた課題（あるいは自ら見つけた課題）を協同で解決することを目標とした学習方法。教師は知識の伝達者ではなく、個々の学習者が、学習活動に参加できるような仲介者的な役割を担う。教材も、画一的に全員が同じ知識を共有するのではなく、各自の参加を深めていくきっかけを提供するものとされる。Speech 的なプロジェクトでは、日本の伝統文化をグループで調べて、英語で発表を行う。Dialogue 的なものでは、インタビューで情報収集を行う。Debate 的なものでは、あるテーマについて賛成、反対の意見を述べるなどの取り組みなどがある。

ポートフォリオ (portfolio)

作品の収集物を意味する。例えば、芸術家は自分の作品を蓄積しポートフォリオを作る。他者は、そのポートフォリオを見て、その芸術家の才能を判断する。このようにして、ポートフォリオは、他者がある人物の能力を判断するための資料の収集物を意味するようになった。ポートフォリオは、ある個人のさまざまな作品を定期的に収集することにより、時間の経過とともに、必要されている分野での成長を示すことができる。このように考えると、評価のツールとしての役割を持つポートフォリオは、他者の目による評価のためのものである。一方、成長のためのツールとしての役割を持つポートフォリオは、自分の目、もしくは自分の成長を願うアドバイスをくれる人間、つまり身うちの人間の目のためのものであることがわかる。ただ、評価ツールとしてのポートフォリオも成長のためのポートフォリオも一つの直線上の両端にあってその役割を全く異にしているのではなく、どちらかという重なり合い、役割や性格が似ている場合も多い。具体例として、「言語教育履修生のためのヨーロッパ・ポートフォリオ」は、教育に関する「個人履歴」、省察を促進する「自己評価 can-do 項目」、評価結果等のデータを保管する「実践記録」で構成されている。これは現職言語教師対象のポートフォリオとしても用いられ、教師教育や教職実践に関する省察を継続して、教師の成長と専門性を高めることを目指すツールとなっている。

ポートフォリオ学習 (learning by portfolio)

学習過程における学習者個人の技能・考え・興味・関心・成果などの証拠を保管するためのポートフォリオを使った学習。学習の成果である様々な提出物をファイルに入れて記録しながら、学習のプロセスを重視する学習方式である。従来のペーパーテストの結果だけで評価せず、学習者の成長を総合的に進めて行こうとする理念による。

補正方略 (compensation strategies) [Open]

母語話者や言語学習者がスピーキングやライティングにおいて、必要な語句を知らなかったり、また即座に適切な表現を思い起こせない時に使用する方略。

マインドマップ (mind map) [Open]

英国の教育者 Tony Buzan が開発した自然な形で脳の力を引き出す思考技術で、中心テーマから放射状にノートを取りながら関連要素を追加していくもので、日本国内では商標にもなっている。

マザーグース (Mother Goose)

英国古来のわらべ歌集。チャンツ (chants) やライム (rime / rhyme < 単語または詩行の特に末尾部分の音が同一で、その直前の子音は異なること。例: ran-man, sword-cord など >) の練習に使われる。

メタ言語 (metalanguage) [Open]

特定の言語を分析したり、記述するために用いられる言語。例えば、文・名詞・過去時制・イントネーション・談話等々といった専門用語や言語規則を説明するための特別語彙。文法書や教科書等に頻出する。

メンター (mentor) [SP]

教師を目指して教職課程を履修している学生や教育実習生及び初任者教員に指導・助言を与える職務を果たすベテランの熟練教師を指す。

ヨーロッパ言語教育履修生ポートフォリオ (EPOSTL / European Portfolio for Student Teachers of Languages)

CEFR の Action-Oriented Approach (行動志向アプローチ) の理念や CLT / Communicative Language Teaching (コミュニカティブ・ランゲージ・ティーチング) の教授法に基づき、Can-do 形式によって言語教師の授業力を明確化したもの。次の4点を特徴とする。①学習と教授の省察モデル、②'I can'形式の自己評価能力記述文、③学習と教授の自律観、④生涯教育として成長するための指針。

ヨーロッパ言語共通参照枠 (CEFR / Common European Framework of Reference for Languages)

ヨーロッパ諸国の調和と平和、複言語・複文化能力を有する市民の育成、人的移動の促進、教師中心から学習者中心の教育理念に立脚して、2001年に Council of Europe (欧州評議会) が開発した外国語教育、学習、評価等のための枠組みである。EU加盟国28ヶ国全てにおける外国語教育に適用できる段階的な基準を定めている。A, B, Cの3レベルのそれぞれをさらに2段階に分けた尺度を設定している。このシステムは現在、多くの国の外国語教育に採り入れられている。

ヨーロッパ言語ポートフォリオ (ELP / European Language Portfolio)

個人的文書であり、同時に言語学習に関する情報のツールおよびガイドである。公式的な教育環境内であれ環境外であれ、すべての言語の熟達度と異文化間経験を記録し、総合的な、完全な、国際的に比較可能な方法で提示することを可能にする。自分自身の言語学習を振り返り、それ以上の学習を計画したり、チェックしたりするガイドラインも含んでいる。(Council of Europe, 2002)

ルーティン化 (routinization) [Open]

授業活動の手順や約束事に慣れさせて、学習者が活動内容に集中できるようにすること。

レッスン・プラン (lesson plans)

特定の単元が体系的に教授される概要。次の諸点を明らかにする。①学習目的(新出ないし既習のものを基盤としたもの、まとめたもの、拡大したもの)、②予測される学習結果、③教師や学習者が必要とする機器、資料、教材、④活動内容と種類、⑤学習者の能力差や学習スタイルに応じた活動の展開、⑥言語技能(リスニング、スピーキング、リーディング、ライティング)練習と実践、⑦評価を与える時期、⑧今後の達成目標など。

ロールプレイ (role-play) [Open]

語学教育では、寸劇用のスキットの形を借りて、その登場人物に求められる言語行動(すなわち役割<roles>)を行うことが多い。roleplaying ともいう。

利用者ガイド

J-POSTL の開発

■ EPOSTL の翻案として

ヨーロッパでは、EPOSTL の翻案化や簡略化は編者によって認められていません。EPOSTL の源泉は CEFR (ヨーロッパ共通言語参照枠)、ELP (ヨーロッパ言語ポートフォリオ)、Profile (ヨーロッパ言語教師スタンダード) です。ヨーロッパ域内では、これらのすべての文書を共有し、同じ土俵で、教育機関や国家間の対話と人的交流の促進が重視されています。これが、翻案化を認めない理由であると考えられます。

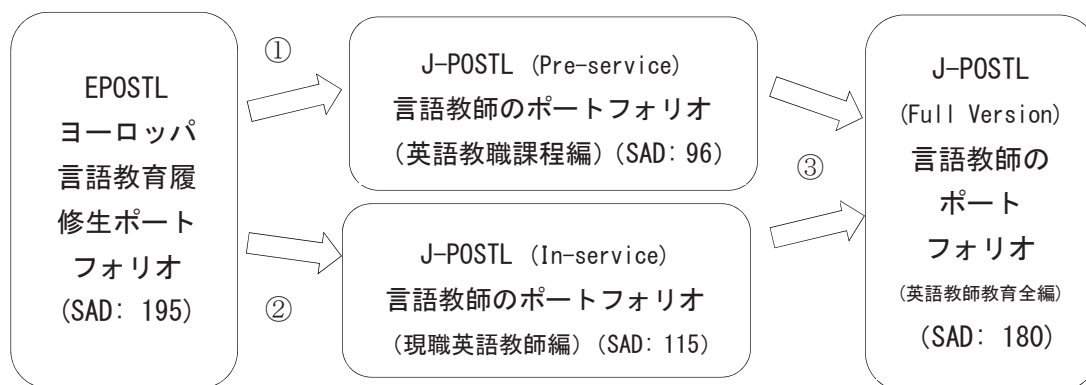
しかし、非ヨーロッパ圏である日本では、事情が異なります。日本には、CEFR や ELP は普及していないし、教師教育のスタンダード (一定の段階ごとに達成規準を特定している枠組み) もありません。教育内容を規定するのは、学習指導要領だけです。また、言語教育教職課程や教員研修の制度も内容も欧州とは異なります。

このような決定的な違いがあるように見えるにもかかわらず、翻案化を試みた理由は、いいものは積極的に取り入れるべし、という姿勢です。EPOSTL には、これまでヨーロッパにおいて研究されてきた、言語教育のあらゆる知見が含まれています。自律的な成長を促すとされるポートフォリオという形式を取り入れている点ばかりではありません。具体的には、Can-do の形で 195 の自己評価記述文に知見が集約されています。教育的文脈が異なるとはいえ、言語教育の本質と方向性は日欧で大きく異なるとは考えられません。これらの記述文の多くは日本にも受容できるはずです。

なお、日本では外国語は英語が支配的です。さらに、本文書の編纂者もすべて英語教師です。したがって、副題をはじめ全体の記述が「英語」になっていますが、他の言語教師の場合なら、その言語名に変えれば、十分活用できるものと考えています。なぜならば、EPOSTL は英語に限らずすべての言語教育に通用するように編纂されており、J-POSTL もその理念を踏襲しているからです。

■ J-POSTL の枠組みと開発の過程

まず、翻案化の全体の構造を、開発過程も考慮して図示すると下図のようになります。



冒頭でも述べた通り、J-POSTL は主として、EPOSTL の中核をなす 195 の自己評価記述文 (SAD: Self-Assessment Descriptors) を翻案化したものです。したがって、それぞれのボックスにある SAD の数値は注目しておく必要があります。

次に、図の①～③の順に開発過程を簡潔に説明しましょう。

- ① 2009 年度に第 1 段階の翻案作業を開始しました。目的は、まず養成課程の学生を対象とした SAD を特定することです。EPOSTL では教師の言語能力を CEFR で最上位の C2 レベルに設定しているし、実習期間がヨーロッパ諸国の場合と比べてかなり短いこと、教職課程履修生の教職への就職率が格段に低いことなどが課題でした。しかし、本研究会が過去数年間行ってきた国内外の教師教育の調査結果を参考に、英語教師教育に携わる大学教員 33 人の協力を得ながら、年度末に SAD を 100 項目特定することができました。この SAD の妥当性、有効性、実用性を検証するために、ポートフォリオの形式に整え、英語科教育法履修学生を対象に 2010 年 11 月～2011 年 11 月に第 1 回経年調査 (12 大学, 回答数 149 件), さらに、各記述文の解説付きポートフォリオに改良して、2011 年 5 月～2012 年 12 月に第 2 回経年調査 (5 大学, 回答数 55 件) を行いました。その結果、本文書は英語教師養成段階のツールとして妥当で有効であることが実証され、前項で述べた 5 つの目的が受容可能であることが検証されました。同時に、記述文の難度の差も明らかになり、養成課程の記述文を特定できるようになりました。
- ② 2011～2012 年度は、上述の経年調査に加え、第 2 段階の翻案作業に取り組みました。目的は、全国調査を行い、その結果に基づいて現職教師のための SAD を特定することです。養成課程のために使用したもの、日本の文脈にそぐわないものなどを除き、日本語の文言を整えた EPOSTL の残りの 78 の SAD について 2011 年に予備調査を行いました (教育委員会指導主事回答 18 件, 現職英語教員回答 34 件)。その結果を受けて、2012 年 3 月の聴聞会 (中高英語現職教員など 11 人) にて、全国調査で使用する SAD をさらに検討しました。その結果、全国調査では授業力のめやすとなる記述文 41, 異文化能力に関する記述文 8, 自律に関する記述文 13 で質問紙を構成することになりました。ただし、残りの記述文は不要という意味ではなく、後日の検討に委ねることになりました。2012 年度前期に全国 1 万 6 千校余りの中等学校の校長宛に質問紙を送付し、有効回答 5658 件を得ることができました。回答を分析した結果、質問紙にあるすべての SAD は日本の教育的文脈で受容可能であること、多くの SAD はキャリア段階別に分類が可能であるが、主に異文化や自律に関する SAD は現状では分類が困難であることが判明しました。この調査結果と、質問紙で使用しなかった SAD, さらに上記①の検証結果から、EPOSTL の日本版翻案として 2 種類のポートフォリオを開発することができました。
- ③ 以上①の成果が『言語教師のポートフォリオ (英語教職課程編)』, ②のそれが『言語教師のポートフォリオ (現職英語教師編)』です。さらに、①と②の成果を合体させたのが③の『言語教師のポートフォリオ (英語教師教育全編)』となります。

ヨーロッパにおける EPOSTL の導入・利点・課題

■ 背景

EPOSTL はヨーロッパの言語教育の柱となっている 3 つの文書を源泉として開発されました。それぞれの文書は次のような観点で、EPOSTL に生かされています。

- ・ ヨーロッパ言語共通参照枠 (CEFR) : Can-do 形式, 学習と教育の省察モード, 学習と教育に対する自律観, 生涯教育, など。
- ・ ヨーロッパ言語ポートフォリオ (ELP) : 省察を重視する主な構成 (自分自身について, 自己評価, ドシエ)。
- ・ ヨーロッパ言語教師教育スタンダード (Profile) : 参照枠という考え方と, 自己評価記述文に対する知見。

■ 導入

EPOSTL はヨーロッパ中の教員養成機関で広く使われています。次の方略的な観点は、EPOSTL をうまく導入するためには重要であると思われる。

- ・ 現行の教員養成プログラムに EPOSTL を統合する
- ・ 教育機関の全ての教員養成者が EPOSTL を使用する
- ・ 教授法あるいは授業力養成講座, 教育実習, 移動性プログラム, 講座の課題, 学期レポートなど, EPOSTL を利用するための様々な選択肢を探求する
- ・ 教員養成者の間で, EPOSTL を活用するための目的・内容・時間的制約など具体的な実行案を合意する
- ・ メンター (学校での実習指導担当者) を加える
- ・ EPOSTL を導入する際, 教員養成者, メンター, その他関係者ためのワークショップや研修会などの支援対策が必要となる
- ・ 国家的 EPOSTL ネットワークを設置する

■ 導入の利点

- ・ 包括的で体系的な能力中心の記述文を提供する
- ・ 教師教育において省察を促進する
- ・ 能力, 目標, 内容を透明化する
- ・ 教育実習生の自己評価を促す
- ・ 教育者, メンター, 学生間の対話と議論を奨励する
- ・ 教員養成者機関と学校との架け橋を創る
- ・ 教員養成者がカリキュラムを計画する際に役立つ

■ 課題

EPOSTL のような革新的な道具を使う際, さまざまな問題を解決する必要があります。教員養成者としての観点から見ると, 次のような難問があります。

- 学生たちは、事実を与えられるのではなく、教師教育の省察モードを受け入れなければならない
- 学生は自己評価をすることに乗り気ではない
- 最初、学生は 195 項目に圧倒されてしまう
- 大学のすべての教員養成者に EPOSTL を体系的に使わせることは、相当なエネルギーと組織化が求められる

EPOSTL を用いたことがある学生からの発言の引用で、この稿を閉じたいと思います。「初めはそうは思っていなかったが、今は、EPOSTL を使うことは良いと思っている。EPOSTL はとても役に立つことがわかりました。自分の進歩を見つけることができたし、実際、自分の教授スタイルについて深く考えたのは初めてだった。EPOSTL は TEFL における自己成長の日記のような働きをしたし、そして自分のスキルをチェックすることができた」。(Newby, 2011)

引用

Newby, D. (2011). 「基調講演：CEFR, ELP, EPOSTL のヨーロッパにおける文脈化」
『英語教師の成長に関わる枠組みの総合的研究』平成 22 年度文部科学省科学研究費（代表：神保尚武）

成長のための省察ツール
言語教師のポートフォリオ【英語教職課程編】

©Council of Europe, 2014

平成 26 年（2014）3 月 9 日初版第 1 刷

発行者 JACET 教育問題研究会

JACET SIG on English Language Education

<http://www.waseda.jp/assoc-jacetededu/>

監修 神保 尚武

編集代表 久村 研

教職課程編 編集担当 高木亜希子

〒169-8050 東京都新宿区西早稲田 1-6-1

早稲田大学商学大学院 神保尚武 気付

電話 03-5286-2081

印刷所 有限会社 桐文社

〒142-0053 東京都品川区中延 6-2-22 エボンビル 1 階

電話 03-3781-4010

本文書の発行には科学研究費補助金（基盤研究(B)）（課題番号 25284109）が使われています。

成長のための省察ツール

言語教師のポートフォリオ

JACET教育問題研究会 <<http://www.waseda.jp/assoc-jacetenedu/>>

監修：神保尚武／編集：久村 研，酒井志延，高木亜希子，清田洋一

■「言語教師のポートフォリオ」には，【英語教師教育全編】【英語教職課程編】【現職英語教師編】の3編があります。それぞれの用途によって使い分けることができます。本ポートフォリオの主な特徴は次の通りです。

- ・英語教師に求められる授業力を明示する。
- ・授業力とそれを支える基礎知識・技術の振り返りを促す。
- ・同僚や指導者との話し合いと協働を促進する。
- ・自らの授業の自己評価力を高める。
- ・成長を記録する手段を提供する。

■本ポートフォリオの中核には，Can-do形式の180の自己評価記述文があります。これらの記述文は，授業力に関する体系的な考え方を提供しており，単なるチェック・リストではありません。教職課程の履修生，現職教師，実習や教員研修の指導者・メンターなどが利用したり，お互いに意見を交換したりする際に，省察を深めるツールとして機能すること，教職の専門意識を高める役割を果たすことが期待されます。